

5 繊維製品・木炭

i 繊維製品 (PL. 76・77)

- な わ a 縄 (1~3) 2本撚りの麻の細縄である。いずれも、右撚りであって、瓦の縄叩きの撚りと一致している。撚りがもどったものもあるけれども、撚りはおおむねよくかかっている。縄の太さから3種類に分類することができる (Fig. 47)。1は直径0.9cm前後で、現存の長さは約32cmあり、一端を結節している。2は直径0.6cm前後で、よく旧状をとどめており、全長約2.7cmある。両端を蝶結びを崩したような恰好に結んでいる。第3種は直径0.3cm前後で、長さ10cm前後の残片が数本ある。これは一端を結節する例である。いずれもSK820出土。*
- 冠の断片 b 網状漆製品(4) 断片である。麻編みに漆がけしたもので、先に報告したものと同材同巧であって、正倉院蔵の冠断片と一致する。SK820・SK870出土。*
- つるまき c 蔓巻き製品(5) 蔓をたばねた芯に蔓をコイル状に(千段巻)巻きつけた棒巻の残片である。芯の蔓は合せて7本あり、4本と3本とを2重にかさねてつくっており、芯の周囲に蔓を巻くので横断面は台形を呈している。棒巻の一部には、ほかより隆起する部分があり、芯材をつぎたしていることがわかる。巻蔓のつぎたしは結ぶことなく、端でいくらか余分をのこしながら2本の巻蔓をからませて、おのおの先端を棒巻きでおさえて固定している。現存の長さから判断すると、桶か籠の把手であろう。現存の長さ約34cm、幅2.1cm、厚さ1.3cm、蔓1本の直径0.3cm前後である。SK820出土 (Fig. 47)。*
- ほうき d 箒 (6~8) 3個体分出土。2本は草箒で1本は藁箒である。
- 6は木製の柄をつける草箒。柄は割り材からつくる丸棒で、一端を尖らしホウキグサの箒先をまといつけ、蔓でしばって固定する。箒先は大方減失しているが、柄に箒先上端があたる部分に木理に直交する刃痕がのこり、箒先の着装後上端を切り揃えたことがわかる。現存の長さ約36cm、柄の直径1.8cm、箒先柄着装部分直径約3.2cm。*
- 7も草箒であるが、木柄は着装しない。ホウキグサをたばね、本の部分で2箇所を蔓巻きにして固定し柄にする。現状では扁平に残るが、もとは円くたばねた可能性がよい。箒先の先端は減失。現存の長さ約39cm、柄部の幅約5.5cm、厚さ約1.5cm。*
- 8は藁箒で箒先を残存する。藁をたばね本の部分に紐をまいて固定しているようであるが保存が悪く詳細不明。現存の長さ約28cm、本の直径約6cm。以上SK820出土。
- たけ製品 e 竹製編物(9~12) 編み方がかろうじてわかる程度の残片である (Fig. 47)。
- 9は表皮をとり去った竹条を用いる。1目を1.2cm×0.6cmの長方形にあける2本寄せ、四つ目編み。単位竹条の幅0.4cm前後。10も表皮をとり去った竹条を用いる。2本寄せ、2本超え、2本潜り、1本送りの網代編み。単位竹条の幅0.3cm前後。11も表皮をとり去った竹条を用いる。幅の広い竹条を約0.5cmの間隔で配し経とする。これに幅の狭い竹条を緯として密に編むござ目編み。単位竹条の幅0.5cm弱と0.3cm弱。12は表皮をとどめる竹条をもちいる。心心の間隔を4cm前後におく。2本寄せ六つ目編み。縁の部分も残存するが編み方不明。単位竹条の幅0.6cm前後。以上のうち9・10はSK2104、11はSK870、12はSK820から出土した。*

1) 『平城宮報告Ⅱ』p. 75, PL. 56, 帝宝博物館『正倉院御物図録』(1934年)第3巻第51図。

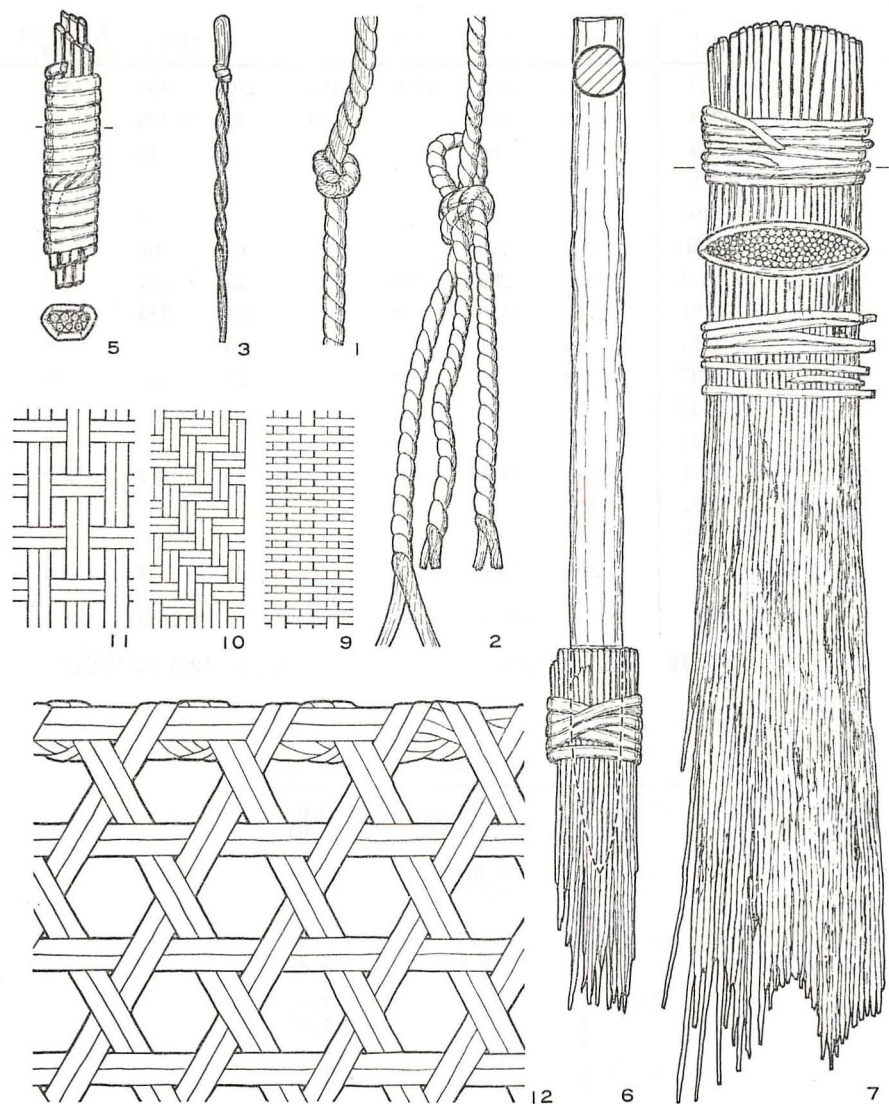


Fig. 47 繊維製品・編物・帯

ii 木炭ともえさし

土壙 SK820 からは、相当量の木炭が出土した。この機会に、同土壙で出土した資料にあわせて宮内各所で出土した木炭について、奈良教育大学教育学部平田善文助教授（林学専攻）に調査を依頼した。以下にその成果の概要をかかげることにしよう。

- * 宮内各地区各遺構から出土した木炭がそれぞれ何の木で作られ、重量がどのくらいであるかは表示したとおりである（Tab. 20）。総重量は 21,107g あり、このうち SK820 出土の木炭は 10,554g で、全体の 5 割におよんでいる。

原木の種類は、木炭の木口面と樹皮との特徴によって、比較的容易に判定できた。クスギが最も多く、全体の 6 割強を占めており、コナラがこれにつぎ、以下、針葉樹（多くはヒノキ、他にマツ）、雑木の順である。なお針葉樹の炭の質はケン炭である。それらのうち、高級燃料ともいえるカン炭が SK820 に集中していることが注目される。

肉眼観察によって木炭の性質をみると、色は漆黒色で、炭化がじゅうぶんであることをしめしており、木口面・破砕面の光沢は、ともに金属光をしめしている。また、比較的高い金属音を発し、硬度の高いことも明らかである。それらのうち、高級燃料ともいえるカン炭が SK820

地区	遺構	全重量	クスギ	コナラ	カシ	雑木	針葉樹	未炭化のもの もえさし
6AAB	土壇SK820	11217	7739	1790	494	205	430	559
6AAO	土壇SK870	480	147		69	93	106	65
〃	土壇SK869	79	64				15	
6ADH	土壇SK1210	17						17
〃	土壇SK1407	118	42				12	64
6ADF	溝SD1760	302	170			65	61	6
〃	土壇SK1623	498	206	30		25	203	34
6AAO	土壇SK2101	2760	1420	390		121	336	493
〃	土壇SK2113	85	54			25		6
6AAF	溝SD3297	359	83	30		20	137	89
〃	溝SD3155	91	83					8
〃	溝SD3137	83	75					8
〃	溝SD4951	2053	1431	168		53	88	313
〃	溝SD4992	391						391
〃	溝SD5825	35	32	3				
その他の全遺構		2441	1388	72		146	332	503
合計		21107	13032	2483	563	765	1789	2475

Tab. 19 平城宮出土の木炭

単位 g 1968年2月現在

	容積量	硬度
クスギ	0.710 (0.742)	9.0 (11.0)
コナラ	0.483 (0.557)	7.5 (10.5)
カシ	0.773 (0.857)	11.5 (12.5)
針葉樹	— —	1.0 (1.0)
雑木	0.323 (0.357)	1.5 (1.5)

単位 () 内は現代木炭の値

Tab. 22 平城宮木炭の容積量と硬度

に集中していることが注目される。

つぎに、容積重をしらべ、硬度を三浦伊八郎博士考案の木炭専用硬度計によって測り、これを現在の木炭について、東京大学林産化学教室が出した、各樹種ごとの平均値と比較した。

(Tab. 21)。平城宮木炭は、容積重・硬度ともに、現在の木炭における平均値より、やや低い値をしめしているものの、じゅうぶん良炭の範囲内に入るものである。クスギ・コナラ・カシ * の類が良炭を作る樹種であることが、当時すでにじゅうぶん認識されていたことも、また明らかである。クスギなどの広葉樹は良質木炭の比率が多いことから、内裏に関係する暖房用・調理用を使用したことが推定できる。

もえさし なお木炭以外に、未炭化のものと、もえさしとがある。もえさしには、ヒノキの小割り(長30さ~40cm, 太さ2~3cm角)が多く、木炭に火をつける際に、ツケ木としてもちいたものであろう。